

7 小学生の暴力的行動に関する基礎的研究- 背景要因および対応策の検討-  
研究代表者 滝 充 (総括研究官)

① 研究の趣旨, ねらい

近年、注目の高まっている小学生の暴力的行動全般に関して、科学的な根拠（エビデンス Evidence）に基づいた議論を行うために必要となる基礎資料を収集するとともに、その資料に基づいて背景要因や対応策を検討する。

そのために、『学級担任調査』と『児童（生徒）調査』の二つを組み合わせ、2年間にわたって調査を行い、分析を行う。そして、(1)小学生をめぐる暴力の状況、(2)個別特殊な要因との関連、について検討を行う。

実際には、『学級担任調査』については、平成18年度3月、平成19年度9月と3月の計3回実施し、『児童（生徒）調査』については、平成19年度の6月と11月、平成20年度の6月と11月の計4回実施した。

② 研究成果の概要

- 3回の『学級担任調査』を通して繰り返し登場する（教師によって問題を指摘される）児童は少ない。
- 教師の「暴力的行動」の捉えにはかなり大きな差がある（そこに含める行為に幅がある）と考えられ、それにはマスコミ等の報道の影響が大きいと思われる。（マスコミ報道が盛んな時の方が、数多くの事例が回答されてくる。）
- 教師の捉えは、子ども自身のストレス感を必ずしも反映したものではなく、もっぱら教師側の問題関心に基づいている。
- 現状の対応のほとんどは、「学級担任を中心」として「見守る」というものにとどまる。
- 教師が「暴力的行動」に関して共通の捉えができるよう、問題を客観的に整理していくことが望まれる。

③ 中期目標との関連性

- この研究は、生徒指導研究センターの中期目標である【目標1】「生徒指導の充実を図るための調査研究を推進する」に合致したものであり、今後、センターが行う調査研究のためのパイロット調査として位置づけられるものである。

④ 本研究に盛り込まれている主なデータ項目

- いわゆる暴力行為以外に、暴言や攻撃的な態度を含めた幅広い「暴力的な行動」を対象として、
  - ・そうした行為の有無（頻度）
  - ・誰に対して向けられた行為なのか（以上、選択肢による回答）
  - ・そうした児童の行動の原因や背景として考えられること
  - ・その児童に対する学校としての対応
  - ・その児童に対する学級担任としての対応（以上、自由記述による回答）

⑤今後の研究予定

現時点では、特に考えていない

⑥キーワード

- (1) 小学生                      (2) 暴力行動                      (3) ストレス  
(4) 家庭環境

⑦本研究の研究報告書

- 科学研究費報告書『小学生の暴力的行動に関する基礎的研究 - 背景要因および対応策の検討-』

⑧関連する先行研究や参考となる研究等

- 『「突発性攻撃的行動および衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究』  
国立教育政策研究所、平成14年3月